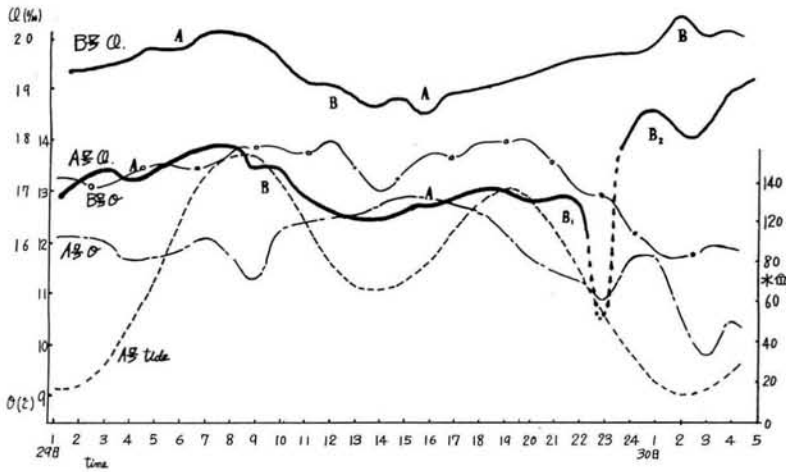


複雑な現象が、この湾ではかなり規則的に起つている。これらについての量的な取り扱いや検討は資料の集積と共に今後の問題であるが、今まで、どうしても、概括的にしか得られなかつた湾内水の動きを、このような連続観測を通してさらに詳しく、そして正しく理解していくことが、今後、沿岸における増養殖場の新しい漁場の造成や開発に大きな役割をするものと思われる。



才3図 観測塔による連続記録の一例 (昭和39年1月29日~30日の記録)

- A号Cl : A号観測塔における塩素量(‰)      A : 塩素量の増加時に一時低下する現象  
 Q : A号観測塔における水温(°C)              B : 塩素量の減少時に一時増加する現象  
 tide : A号観測塔における水位(cm)  
 B号Cl : B号観測塔における塩素量(‰)  
 Q : B号観測塔における水温(°C)

#### 4. 最近の気温と海況

(1963年9月~'64年3月)

進士 福太郎 (気象庁)

今冬ノリは全国的に不作で、特に北日本が悪かつたといわれている。

不作の原因は複雑であろうが、全国的に不作で、特に北日本が悪かつたということであるならば、

まず、広い範囲にきく気象を調べ、次に海況に当たることが、今冬の原因究明になりそうに思われたので、参考までに、2, 3の調査結果(概要)を報告したい。

- (1) 日本各地の旬平均気温偏差は全国的に似た経過をたどっており、11月頃から1月にかけて各地とも平年より高温になっている。
- (2) 日本各地の半旬平均気温偏差(中でも、1月中旬前半旬の稚内の $+4.9^{\circ}\text{C}$ 、厳原の $+6.4^{\circ}\text{C}$ など異常に高いのが目立つ)は、前半旬平均 $+$ 、後半旬平均 $-$ (または後半旬平均 $+$ 、前半旬平均 $-$ )のように変動しており、両半旬平均が同符号であつても大きく変動している。
- (3) 日本各地の旬平均沿岸水温偏差は、旬平均気温偏差曲線におおむねホローしていて、11月から1月まで平年の水温より $1^{\circ}\sim 3^{\circ}\text{C}$ 高く、特に北日本が高い。
- (4) 今冬の日本近海の月平均表面水温偏差は、三陸および北海道東沖合が平年の水温より $1^{\circ}\sim 2^{\circ}\text{C}$ 高く、以南の水域では沿海は平年並ないし低め、沖合は平年並ないし高めになっている。
- (5) 今冬の日本近海の $100\text{m}$ 層水温は、昨冬の水温より北低南高で、昨冬と一昨冬の水温差とは反対になっている。

以上が調査の概要であるが、干出などのこともあり、ノリは生物であるので、特に(2)に注目したい。

(年によりところによつて、不作のオ一原因は異なるであろうが、オ一不作原因があつて、それに附随原因が次ぎ次ぎと重なつて、大不作になるのではなからうか)

## 5. 昭和38~39年の冬を中心とした本邦の気温の経過

須 田 建 (気象庁)

昨年(昭和38年)の夏から今年(昭和39年)の春にかけての本邦の気温経過の特徴について概要を申しあげる。オ1図は昨年8月から今年(昭和39年)の4月までの月平均気温の偏差、つまり月平均気温が長年の平均値に比べて高かつたか低かつたかを、札幌、東京、大阪、鹿児島島の4地点について示したものであるが、これを一見すればすぐわかるように昨年11月から今年(昭和39年)の春までは大体において気温は各地とも高く、特に12月と1月とはかなりの高温で、いわゆる暖冬であつたといえる。ではどうしてこのように今年(昭和39年)の冬は暖かつたのか。

よく知られているように冬にはシベリアや北氷洋など日本の北のほうの高緯度地方では、日射